

美術教育における「織り」の実践的研究Ⅲ

Practical Research on 「Weave」 in an Art Education Ⅲ

堀 祥子*・富岡卓博**

Sachiko HORI and Takuhiro TOMIOKA

キーワード：織り 手織り 創作織り機 美術教材 美術教育

はじめに

情報社会あるいは大量消費社会となった現代において、それらはライフスタイルの多様化をもたらし、「ファストフード」「ファストファッション」等^(註1)の言葉で表されるように、「早さ」や「コストをかけないこと」があらゆる価値観の主幹となっている。

しかし、そのような現代においても、伝統工芸品の着物やあるいは家庭で眠っているそれらを生かしたりメイク衣料、または裂き織り^(註2)などを生かした小物など手芸・工芸品としての「織り」は女性を中心に関心が高い。その理由を下記に考察する。

そもそも「織り」^(註3)の行為は、たて糸とよこ糸を交互に絡める単純なものである。にもかかわらず、日本ないし世界各国の民族衣装や生活を彩るそれらを見たとき、その行為からは想像出来ないデザインの独自性があり、絶えることない長い時間の流れの中で育まれた技や、ぬくもりの蓄積に心打つものを感じずからこそであると考えられる。

元来、家庭の中で口頭や見ながらまねることで時間をかけて受け継がれた「織り」は、教育の原型とも言える。その行為を改めて見直し価値付けを行うことの意義は重要であると考えられる。しかし、現在の学校教育の中で、服飾などの一部の専門教科以外に、図工科や美術の教科書において実践の取り扱いがほぼなく、家庭科においても鑑賞資料や参考資料として一部取り扱われる程度である。

本論は、ライフスタイルが多様化し、衣類が工業製品として大量生産され安価に手に入る現

代において、「織り」の行為を今日の美術教育の新しい造形教材として生かさないか、との発想から、実際にいくつか試み、教材としてその可能性を考察したことの報告である。

これまでの「織り」の実践的研究の分析

これまでの研究報告^(註4)において、織りの歴史背景や行為の分析、織り機の簡略化と試作と実践を行ってきた。

その結果、糸という線材を織ることで面材に変化させることが出来た。またその上にパッチワーク（コラージュ）や刺しゅう（ドローイング）を加えることで、既存の美術教育における水彩絵の具やパスなどと同じように、新たな、かつ自由な描画材としての効果が確認できた（写真1）。



写真1 生徒作品から

方形の中でよこ糸を部分的に切り替える技法で模様を表現し（カボチャとお化けの地模様の部分）、さらに刺しゅうの技法を加えることにより、自由な曲線を表現した（星や目、口、カボチャのへた部分）。絵として飾るために額縁に入れた作品である。

* 岐阜聖徳学園大学教育学部非常勤講師

** 岐阜大学教育学部美術教育講座

Department of Art Education, Gifu University

一般的に織り機は、四角い定型の枠があり、それに即して方形の織物をつくりだす。今回は学校教材の視点から、その枠を解放し、ある有機的な形（フィギュア）を持ったものの制作が可能ではないかとの着想に至った。また、手工芸としての織り作品との差異を出すことも可能であると考えた。

調べてみたところ、中学生を対象に編集された美術資料集^(註5)に釘とベニヤ板を利用して作る織り機が紹介されていた。しかしそれは大まかな過程の紹介にとどまり、試作をしたところ、そのまま授業として展開するには考えにくいものであった。(写真2)。

その試作をもとに改良を加えて、より実践的な方法が可能か否かを本論では追求していく。



写真2 釘打ち織り機

釘を打ち付けてたて糸を張った後に、外周に糸を一巻きする。これが織物の「耳」の役割となるのだが、このことは試作をしていく中で理解できたことであった。

実践 I

フィギュア織り機による創作織り

実践の方法

実践報告する内容は下記の通りである。

実践の目的

- ・織りによる教材開発の目的
- ・従来の方形状からより自由な形状（フィギュア）への挑戦
- ・その為の織り機の開発

- ・フィギュア織り機による作品の制作

本実践から得られた成果と問題点を明らかにし、今日の美術教育において「織り」が、造形表現教材として有効性を考察する。

1- (1) 対象者と指導者および実施時

・対象者：岐阜大学教育学部，教育学研究科の家政教育専攻今村ゼミ所属学生，女性8名。

・指導者：堀 祥子（岐阜聖徳学園大学教育学部非常勤講師）

・実施期：平成21年5月，2時間。

1- (2) 実践方法

これまでの研究報告において、押しピン（通常の画鋏よりも刺しやすいように持ち手付きのもの。本稿では以後、ピンとする。）を画板に刺し、織り機とした実践で、制作の際に大きさが手のひらにのる程度とし、設定時間内で仕上げる事が出来る様にした。ピンを隙間なく並べた時の間隔は、持ち手の都合上、1cmとなる。

制作したい形の型紙を方眼紙を使い、あらかじめ制作した。それをベニヤ板に取り付けて、適切な位置にたて糸を張るためのピンを刺すことを、指導者があらかじめ用意した実物を示しながら説明した。

準備として、

- ・毛糸20色ほど。今回は短時間で制作をおこなうので太い糸を中心とし、他に細くて毛足の長いものや短いものを取り混ぜた。それらをたて糸とよこ糸として使用した（写真3，写真4）。



写真3 主にたて糸に使用した毛糸

節目のある毛糸と均一に紡がれた太い毛糸。短時間で織り上がるよう主に、たて糸と一部のよこ糸に使用した。白色にしたのは他の色の糸との混色効果をねらうためである。



写真4 主によこ糸に使用した毛糸

太い毛糸と引き揃えて使用することで混色効果をねらうため用意した糸。一部たて糸と主によこ糸に使用した。

- ピン（一人あたり20個）たて糸をかける杭の代用とした。
- ベニヤ板（約縦30cm，横30cm，厚さ3cmのもの）人数分。織り機本体のフレームの代用として使用した。
- フォーク（プラスチック製15cm長）人数分。箆の代用として使用した。
- 毛糸用針（金属製7cm長，径2mm。針穴2mm幅）生徒数。板杼の代用として使用した。
- 手製毛糸通し具。毛糸用針としても使用した。^(注6)
- 方眼紙（1cm）15cm四方に切ったものを人数分用意した。直接作りたい形を鉛筆で記入し型紙とした。

①導入

最初に「織り」の歴史^(注7)と行為の概略を説明し、これまでの実践で制作した織り機本体（写真5，写真6）や作品の実物（写真7）を提示し導入。

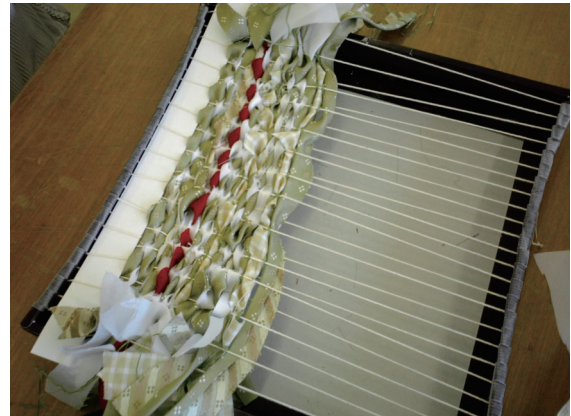


写真5 空き箱織り機

空き箱の両端に等間隔に切り込みをいれ，そこにたて糸を張り，よこ糸を織っていく。

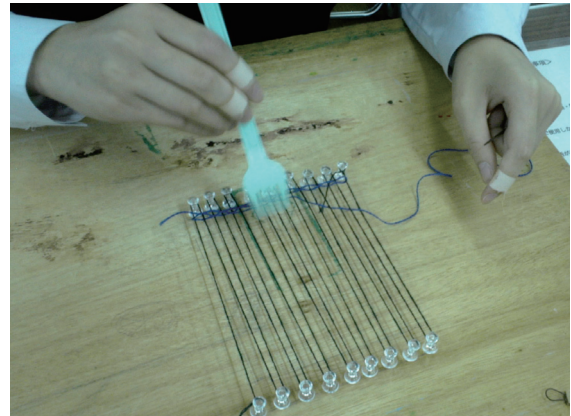


写真6 ボード織り機

空き箱の代わりに画板を使用し，切り込みを入れる代わりにピンを等間隔に刺す。ピンのつまみ部分を隙間なく並べたとき，1cm間隔となる。



写真7 ボード織り機試作品

織りの基本的制作過程と用具の使い方，使用する素材を提示するために用意した試作品。

今回の実践方法について板書で説明し、あとは実制作を通して個別指導によって理解をはかることにした。

②型紙作り

方眼紙の中に自分の作りたい形を鉛筆でアイディアスケッチした。準備した毛糸の太さや素材感からイメージをふくらませるとよいことをアドバイスした。

③ピン打ち

ベニヤ板 (30cm×30cm×3cm) の上に置く。図形の上辺と下辺、それぞれの輪郭に沿ってグリッドの交点上に、1cm間隔にピンを並べて刺すよう求めた。図形に対して、たて糸を垂直に張るために、上下のピンの位置も垂直に揃えることを、あらかじめ用意した実物で説明をした。(写真8, 写真9)

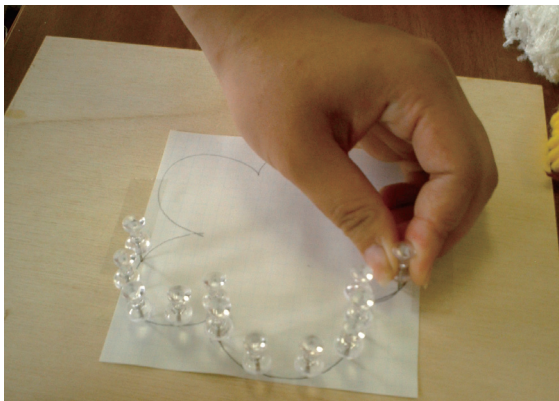


写真8 ボード織り機

花の形を表現しようとしている。方眼の交点にピンを刺しているところ。凹凸部分が多くあるため、ピンを刺す位置は、形の変わり目に刺すことで、メリハリを出す。

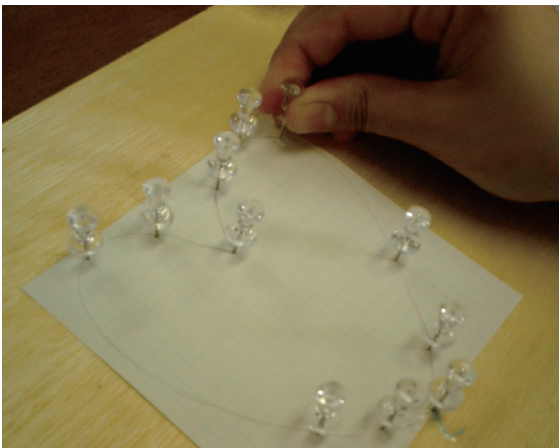


写真9 ボード織り機

ハート形を表現しようとしている凹凸が少ない図形なのでピンを刺す場所に比較的悩むことはなかった。

④たて糸を張る

ピンにたて糸を掛けるよう求めた。(写真10, 写真11) 今回は太い毛糸を使用して制作時間の短縮をはかった。たて糸を均一の力で張ること、織っていく際にピンが動かないようしっかりと刺さっているか確認させた。



写真10 ボード織り機

将棋の駒の形を表現しようとしている。たて糸をかけ終わったところ。太い毛糸に茶色の細い毛糸を引き揃えて出来上がりをイメージした色合いを表現している。



写真11 ボード織り機

ひよこの形を表現しようとしている。一見複雑な形に見えるが凹凸部分は少ないため、ピンを刺す位置は簡単に割り出せた。黄色い細い糸と太い毛糸を引き揃えて色合いを表現しようとした。

⑤織る準備

毛糸通し具の説明と、実際に毛糸通しを実演し、よこ糸を打ち込むためにフォークの使い方も同様に行なう。

⑥織る

たて糸を1本おきに毛糸用針で拾い、交互に1列ずつよこ糸を通していく(写真12)。イメージに合わせて糸の色・種類を変えながら織っていく。今回の実践ではピンの間際までよこ糸を敷き詰めて織る方法をとったため、端の処理は必要がない。

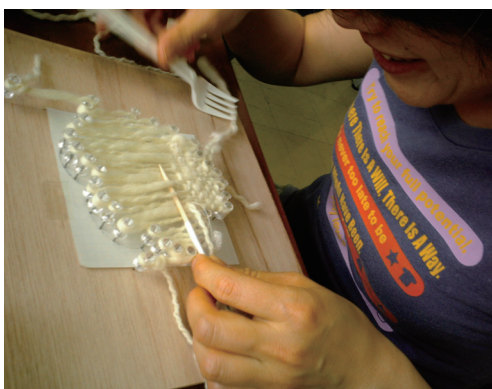


写真12 ボード織り機

羊の形を表現しようとしている。よこ糸を通していているところ。ピンの間際までよこ糸を詰めて織ることで、端の処理の手間を省略できる。

⑦織りあがったらピンを引き抜き、作品を織り機からはずす(写真13)。飛び出た糸を作品に折り込み、必要に応じて刺しゅうを施し(写真14, 写真15)、完成とした。

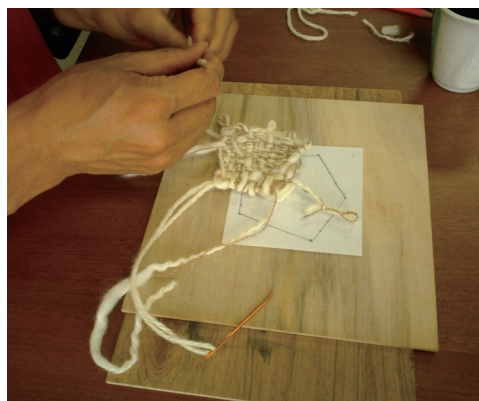


写真13 ボード織り機

写真10で示した将棋の駒。ピンを引き抜き、作品を織り機からはずしたところ。糸が太いため形が円形に近くなった。



写真14 フィギュア織り

作品は写真11の完成作品。ひよこの目の部分に黒い糸で、くちばし部分は濃い黄色の糸を巻きつけるように刺しゅうを施した。



写真15 フィギュア織り

写真12の完成作品。羊の目の部分に黒い糸で刺しゅうを施し、角は茶色の糸を渦巻状に配置することでカラーージュした。

1-(4) 実践1の課題

まず、織り機の制作の際にベニヤ板が固く、ピンをうまく刺せない学生が現れた。急遽、金釘を用意し、軽く打ち付けることで対処した。

次に、凹凸の多い図形においてピンを刺す位置に戸惑う学生が見受けられた。ピンが多いと、たて糸が密になりすぎてしまい、織る時に針に

引っかかる。また、よこ糸を引き抜く時にピンも抜けてしまうことがある。ピンの刺し位置や、糸の太さのため、図形によっては直線や角の部分が表現しきれない作品もあった。

このことから、ベニヤ板をスチロール板に変更する、図形を出来るだけ簡略化するなど、年齢・学年に応じた用具の確保を考慮すべきである。また、今回の実践でも作品の中央部分にすすむにつれて、形が細くなるものが見受けられた。織る際によこ糸を引っ張りすぎないように、指導の上で留意すべきである。

1 - (5) 実践1のまとめ

「フィギュア織り^(注7)」の教材としての試みは以下の成果がみられた。

- ・従来の方形のイメージを取り払い、比較的簡単な形状(フィギュア)にもとづきアイデアスケッチをすすめたが、自由な形状の織り機を制作し、作品を織ることに、全員が抵抗感なくイメージ通りの作品を仕上げることが出来た。また、出来上がった作品は、生徒一人一人の意図が見て取れる多様性にとんだ内容であった。
- ・織り機の制作は、ピンが抜けないように配慮すること、ピンを形の変わり目に打つことでメリハリを生むこと、それによって形状(フィギュア)の多少の変更も必要な場合があることをあらかじめ提示しておくことで、困難なく出来た。また、こんなものが織り機になるのかと、驚きがあった。
- ・糸の太さやたて糸の張り具合は、今回の作品の大きさでは、気にする必要がない。ピンを刺す位置で、形状(フィギュア)を変更した図形(写真16)があったが、逆にそこから見立てを行い、新たに発想をひろげることで、思わぬ形が生まれるおもしろさを発見でき、初心者でも十分に楽しく取り組むことが出来る教材であった(写真17)。

曲線を表現する際や、形状に添うようによこ糸を操作する必要がある。指導者が作業手順や、問題点が発生した時の対処法を熟知し、技術面だけを追うのではなく、作品のあるがままを良



写真16 フィギュア織り

写真9の織りの途中経過。ハート形の下方の曲線部分がうまくいかない。よこ糸を強く引き抜きたこととで輪郭が直線的になった。指導者のアドバイスで、よこ糸を強くひきすぎた部分を曲線に近くなるように修正し、完成させた。



写真17 フィギュア織り

写真10の完成作品。最初のイメージでは将棋の駒であった。仕上がり時の丸みを帯びた形、吊るした時の揺れ具合や糸の端の出具合などから、魚に見立て茶色の糸で目の部分に刺しゅうを施し完成させた。

さと認め、それを生かすアドバイスも重要である(写真18)。以上のことを踏まえさらに織り機の素材を変更と道具を簡略化し、新たな創作織り機を試作し実践を行ったが、これについては次号での報告とし、今日の新たな美術教材として有効か否か明らかにしていく。



写真18 フィギュア織り

写真9の完成作品。ハート形の下方の曲線部分を修正し、余りのよこ糸を情報で環状にして首飾りのようにし、完成させた。

最後に、実践の場を快く提供して下さった岐阜大学・今村光章先生に感謝いたします。

(はじめに、実践Ⅰの文責 堀祥子)

実践Ⅱ

粘土で「織る」一素材開発の試み

本報告のⅠ報とⅡ報に継続して、「粘土の織りによる造形」を新たな教材に向けて、実験的な要素をもって行なった結果を報告する。なお、このⅢ報を本課題の最終とする。

Ⅰ報では、「織る素材の拡大」から発想して「粘土を織る」を着想し、その可能性の実証を探った。その中で、粘土を織りに使えるための形態と織る作業に適する条件を模索することで、一般的に織りに適する糸状の素材に近づけることを試行した。その際の前提としては、学校教材の開発の視点から、出来る限り特殊な設備や用具ではなく、まして、近代的な施設やテクノロジーによることなく出来る方法、いわゆる人の手によるもの作りの考えを基として行なった試みを報告した。

Ⅱ報では、粘土を紐状にして織る造形は単独

では組成上できわめて弱いという大きな問題点がⅠ報の課題から得て、粘土で織る造形を支持する形を求めることを考えた。つまり、粘土を織る造形方法に適合し、しかも造形作品として美的なものを支持形体とする試みである。その具体的な造形へのアプローチとして、中国の中山王墓出土品の中から盛酒器の着目し制作過程の報告を行った。試作であったにもかかわらず、かなりの大きい造形物であったために、他の多くの困難な問題が発生し新たな課題が生じてしまった。

そこで今回は、所期の目的の達成するために支持部分の単純化を図り、円筒を基本形とし造形を試みたので報告する。

実践の方法

実践者は筆者(富岡)であり、本稿の実践Ⅰのように他に対象者はない。

実施期：平成22年9月から11月。

(1) 方法と主な材料・用具

- ・半磁器粘土 2 kg, 朱泥粘土 2 kg, 信楽粘土 10kg, 練りこみ用顔料(青色), ロール和紙, OHP用透明シート

- ・プレス機

粘土紐用に上記2種の粘土を用いた。

①青色紐用に半磁器粘土と重量比5%の青色練りこみ顔料を混入

半磁器粘土は、粘土一般との比較では粘性にやや欠けるが、白色に近い色彩から、色顔料の発色効果がよいことから使用を決めた。

②朱泥粘土は写真19のように鮮やかな朱色で粒子のきめ細かな特徴があり、①の青色に対応する色彩から使用を決めた。

③信楽粘土を織り粘土造形の支持棒とした円筒形用に使用した。可塑性に優れ造形しやすい粘土。

(2) 制作過程

1 支持棒のためのドーナツ型の円筒形作り
(中は空洞)

①写真19のように粘土原形をもとに石膏型を作って対応した。

②石膏型にたたら状にスライスした信楽粘土

を張り込み2体上下に合わせ、半乾燥して取り外す、を4回繰り返して4分の1円弧の粘土のドーナツ型を作った。(織り粘土造形に合わせるため、乾燥防止の箱に保管)



写真19 円筒枠用の石膏型作成

ドーナツ型の円筒の作成のために金属で囲った中に粘土型(原形)をおき、石膏を流しこんで石膏型をつくる

圧による変形防止として用いた。
③織りこみ作業終了後は引き抜き除去

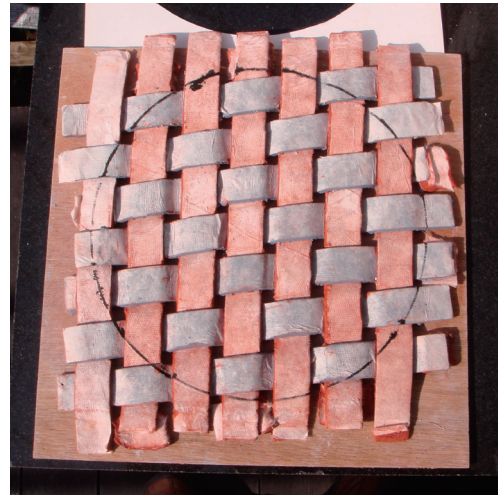


写真21 青色半磁器粘土と朱泥粘土の織り
和紙と透明シートで保護されながら織りこみが終了

2 粘土紐用の色粘土作り

次の写真20のように、重量比5%の練りこみ用顔料と半磁器粘土が混入されたが、ただでさえ粘性の低い半磁器粘土に顔料が加わることで、一層粘性が低くなり、結果として織りに耐えることに関わる大きな課題となった。それをプレス圧縮で少しでも解消出来ないか期待された。



写真20 練りこみ用顔料と粘土

左から、青色顔料、半磁器粘土、青色半磁器粘土、朱泥粘土

3 着色粘土紐による織り造形

- ①報告Iに示した方法で、プレス機と和紙とを使って短冊状にカットした25ミリ幅・長さ30センチの2色の粘土紐をつくった。
- ②さらに①を和紙に加え、OHP用透明シートを同じように紐粘土幅に切断して上下の双方から仮接着して、織りこみの際の加

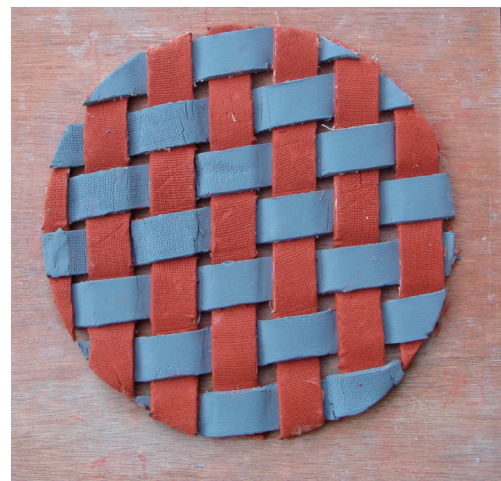


写真22 青色半磁器粘土と朱泥粘土の織り

保護用の和紙と透明シートが除去され、ドーナツ型の支持枠に合わせ丸くした。青色顔料入りの粘土に一部亀裂がある

写真21に見るように、プレス機を用いて粘土を3ミリ厚の均一な平らなたたらにした。プレス機は、たたら機の代用で使用したが、強い加圧によって一定の厚さに粘土がなるとともに、粘土が内部まで締まることを期待した。それによって、「織り」作業で何度も上下することに耐えうるのではないかと判断があったからで、そうした事前の推測は正しかった確かめる必要がある。写真22で示された一部の亀裂は、必ずしも正し

いとは言えないように判断する。つまり、今後解決すべき課題といえる。

4 織り造形と支持形の合体

織りの造形部分は、構造と制法の課題が残り、今までのところ形に保持に弱さがあるように思える。強度を得るためにそれを支持する構造部分すなわち枠を合わせて造形し、両方を合体させた。下の写真23が合体した造形物である。



写真23 完成作品 高さ42センチ
「粘土を織る」を目的とした造形。

実践Ⅱのまとめ

所期の目的の、「粘土で織る」の造形は可能であることが試作によって明らかとなった。色味の異なる粘土を短冊に用いることで色彩的要素を生かすこともできる。上の写真23は、それを実証するための試作品である。これで、粘土素材であることから自由なデザインの造形が可能であり、粘土を織ってできる独自のフォルムや応用が期待できると考える。ただ、教材として子どもが挑戦するまでにはまだまだ解決が必要な課題や、たやすく粘土を織る方法を提案していく必要があることもはっきりしてきた。例えば課題を示せば次のような点である。

- ・短冊ひもの保持力（強度）をあげる。
- ・そのために適した粘土の選択。
- ・たたら（粘土のしまりと曲げ強度）。
- ・粘土保持の創意（和紙、OHPシート利用の他の方法）

本研究第Ⅰ報の中で、厚い色紙を市松模様デザイン的に織る事例を示したが、そうしたアイデアを粘土に変えて何らかの形態に応用発展することも、教材開発の視点から検討していきたいと考える。

本研究全体のまとめ

今日の子どもたちへ向けた美術教材開発の視点から、「織る」をキーワードに実践を軸に報告してきた。十分に成果を示すことができ、高い評価を得ることができるとは思えないが、今日の子ども文化形成に、身近にある素材や用具の創意工夫しだいで、いかようにも新鮮で楽しい造形活動ができることを紹介することはできたと思う。

「織る」と近縁な「編む」造形は、我が国の初期の女子教育に多くの事例を確認できる。これからは性差に関係なく、手遊びやパズルをする行為として、頭と手指を働かせ造形すること、その結果の作品を身近において楽しむことができるのではないか、と考える。

（実践Ⅱの文責 富岡）

- *注1）ファストフード（fast food）は、短時間で作れる、あるいは短時間で食べることができる、あるいはその両方の食事のことである。そのほとんどが外食産業を想定しており、多くの日本人の認識としては、「アメリカ資本のフードチェーンが作る安価で手軽に食べられる、高カロリー食品や食事」である。過剰なパッケージや余剰食品の廃棄問題、また輸入食材に頼る日本の食料自給率の問題などをはらんでいる。ファストファッション（fast fashion）とは衣料品に最新の流行をとりいれながらも低価格に抑え、世界的に短いサイクルで大量生産し販売するファッションブランドやその業態のこと。早くて安いファストフードになぞらえて2000年代半ば頃に生まれた言葉である。商品の入れ替わりが早いゆえに買い過ぎや飽きも早く、ワンシーズンで使い捨てるファッションの買い方も若者の間で定着してきている。また、家庭からゴミとして焼却処分される衣料品は年々増加しており、環境問題としても注目されつつある。
- *注2）裂き織り（さきおり）とは地方によりサッコリ、サッキョリなどとよばれる。たて糸に麻や藤、木綿などの糸を用いて、よこ糸には細く裂い

た古い木綿を織り込んだ布のことである。技法と製品を総称して裂き織りと呼ぶ。木綿を使うため、厚手でごわごわした丈夫で重たい布であった。しかし、木綿は汗を吸い、厚みがあれば風を遮ることから、山や海での仕事着や、時には晴れ着として利用した。また冬のこたつかけなどにもなった。現在ではよこ糸に木綿ではなく、古着の絹着物を裂いて使う場合も多い。

*注3) 織りとは、まず枠の上端と下端に一間隔で杭を打ち込み、たて糸を引っかける。その後、よこ糸をたて糸一本おきに交互に上下くぐらせていく動作のことである。織りは複数の糸で面を成していく。よく編みという言葉と行為に混同されるが、こちらは一本の糸を棒で絡めとり、面にしていく違いがある。

*注4) 富岡卓博, 堀祥子, 新井萌: 毛糸による描画指導の試み 岐阜大学教育学部研究報告=教育実践研究=第10巻, p33, 2008年2月

堀祥子, 富岡卓博: 美術教育における「織り」の実践的研究Ⅰ 岐阜大学教育学部研究報告=教育実践研究=第11巻, p104, 2009年2月

堀祥子, 富岡卓博: 美術教育における「織り」の実践的研究Ⅱ 岐阜大学教育学部研究報告=教育実践研究=第12巻, p71, 2010年2月

富岡卓博, 堀祥子: 5歳児を対象とした総合的造形の教材研究-「おはなしふわふわ」の実践- 岐阜大学教育学部研究報告=教育実践研究=第12巻, p59, 2010年2月

*注5) 美術資料岐阜県 岐阜県中学校美術教育研究会編 修学社刊

試作の様子は下記の論文内に記した。

堀祥子: 美術教育における「織り」の教材開発研究-五感をフルに活用する「ものづくり」の可能性として- 2010年2月, p14.

*注6) 筆者が考案した手製毛糸通しとは、菜箸の先端を長さ10cm程に切り、先と反対側にUピン(女性が髪の毛を留めるのに使用するヘアピン)を、セロハンテープよりも堅牢度が高いビニールテープで留め付けたものである。テープを巻きすぎると厚みが出て、たて糸にくぐらせる際に引っかかるので必要最低限にする。

*注7) 織りの歴史的概要は、大陸より稲作と共に伝わったといわれ、貴重品であった織物は租税の対象ともなった。江戸時代以前は麻や絹が主であったが、木綿がインドより伝わったことから栽培が始まり、政府の奨励も相まって、その大きな生産地は大阪周辺であった。暖かい気候でしか栽培で

きない綿花は、東北地方では貴重品であり、北前船で運ばれた木綿の古着や切れ端の再利用として広まったのが、裂き織りの始まりである。明治末に化学染料が発明されると、それまでの藍を代表とする自然染料では表現できない色合いの布も流通するようになった。また、自動織機も輸入され大量生産が可能となる。とはいえ、冬場や夜間、家事や子育ての合間を縫った女性の家内制手工業が中心であった。豊かでない時代背景からも読み取れるように、あれこれと糸や布を選んで織ったり裂いたり作っていたわけではない。手に入った材料や上納する品を仕上げる過程で出る屑糸などを工夫して再利用し、自前のものをつらえた。材料の調達や織りの工程のほとんどは、地道なつらい仕事であった。反面、家族のことや用途などにあわせて、色合いなどを可能な限りデザインして楽しみながら作った側面も、残された資料から読み取ることができる。そこから育まれた様々な織りの技法は、その家の姑から嫁、母から娘へと伝えられた。第二次世界大戦前までは家庭において織りはごくごく日常的なものであったが、現代においてはコンピュータでの電子制御やプリント技術の発達によって織りや柄のデザインの幅は飛躍的に広がったことに加え、冒頭で述べたライフスタイルの変容から、織りは急速に日常から遠のいていく。

*注8) 「フィギュア織り」の呼称は、今回の実践で、内容をイメージしやすい端的な用語としてはじめて堀(筆者)により使用した。

参考文献

- 裂織の本 著者 八田尚子 発行所 晶文社
発行日 2000年8月10日初版
- 贈り物のゆくへ 手織りの布がある暮らし
著者 福井雅巳 発行所 マリア書房
発行日 2004年10月16日
- アヴリルの糸あそびNO.14 手織り特集
企画・監修 福井雅巳 発行所 マリア書房
発行日 2008年7月26日